

ON THE SPOT

現場から

●スポーツと大学

日本体育大学第10回 トレセンカンファレンス

2012年4月21日、日本体育大学東京・世田谷キャンパス記念講堂にて、第10回トレセンカンファレンス「スポーツを通して考える大学の役割—スポーツ基本計画から読み解く—」を開催した。2011年7月、「スポーツ基本法」が50年ぶりに全面改定され、2012年3月には、「スポーツ基本計画」が策定された。おおむね10年間のスポーツ施策における基本方針が定まった今、大学の役割について方向性と可能性を議論する場にしたいと考え、政策、エリートスポーツ、スポーツビジネスの最前線にてご活躍されている先生方を招聘した。本学学生・院生・教職員のみならず、学外からもトップアスリートやスポーツ指導者、スポーツ

ビジネス関係者など、さまざまな現場で活躍されている方にご参加いただき、本テーマへの関心の高さを伺うことができた。

第1部では、衆議院議員、スポーツ立国調査会副会長の馳浩氏による「スポーツが社会に果たす役割」、専修大学准教授、JOC情報戦略部門長である久木留毅氏による「スポーツ基本計画とエリートスポーツ」、株式会社スポーツビズ取締役部長である田中和弘氏による「スポーツ基本計画とスポーツビジネス」というテーマでそれぞれ20分の講話をいただいた。スポーツに関わる各領域の最前線において実践と検証を繰り返している立場より、事例などを交えながら今後の日本スポーツが目指す方向を提示いただいた。

第2部では、「スポーツを通して考える大学の役割」というテーマにて、高橋健夫教授（日本体育大学大

学院研究科長）コーディネートによるパネルディスカッションを行った。馳氏、久木留氏、田中氏には、パネリストとして再登壇いただき、「スポーツ基本計画」の内容を踏まえ、多様な視点から大学の役割や日本独自のスポーツ文化のあり方について議論を深めた。とくに、大学生アスリートのキャリア形成に対して大学が果たしていく役割については、大学が広域スポーツセンター、総合型スポーツセンターを運営することでトップアスリートの受け皿をつくるという具体的アイデアをはじめとして、キャリア教育・支援システムを構築するうえで有益な示唆を与える内容であった。

スポーツ振興法では、Development of Sports（スポーツの振興）が主たる目的であったのに対し、スポーツ基本法では、Development of though Sports（スポーツを通じた社会発展）とスポーツそのものの捉え方も大きく変化した。その中で、大学の役割を問い直す機会を本カンファレンスでは提供できたと考えている。

今後も日本体育大学スポーツ・トレーニングセンターでは、スポーツを通して有益で魅力ある場を提供していく予定である。

（清水聖志人・日本体育大学スポーツ・トレーニングセンター）

●アスレティックトレーニング

日本アスレティック トレーニング学会設立

去る6月9日、国立スポーツ科学



スポーツが社会に果たす役割について講演する馳氏

センターにて、日本アスレティックトレーニング学会設立総会が開催された。当日の議事は役員選出、定款の承認、事業計画および会計予算案の発表・承認というプロセスが滞りなく進行し、同学会が正式に発足した。代表理事は山本利春氏（国際武道大学）、副代表は小林寛和氏（日本福祉大学）が務め、このほか石山修盟、片寄正樹、木村貞治、鹿倉二郎、杉山ちなみの5氏の理事が選出された。英文名はJapanese Society for Athletic Trainingである。総会における出席者数は59名。会員数は設立に携わったメンバーからの推薦によってすでに107名おり（当日時点）、今後広く参加を呼びかけるといふ。

定款第3条には、「本会はアスレティックトレーナーに関わる全ての領域の科学的研究とその発展に寄与するとともに、会員相互の連携と情報交換を促進し、あわせて内外の関連機関との交流を図ることによって、アスレティックトレーナーの社会的認知を高め、スポーツおよびスポーツ医科学の普及・発展に寄与することを目的とする」とある。これを達成するために、学術集会、研究会、講習会の開催や、学会誌その他の刊行物の発行を行うという。

引き続き行われた祝賀会では、スポーツドクター、アスレティックトレーナーらが次々に挨拶に立ち、思い思いにこれからの日本アスレティックトレーニング学会に期待することについて述べた。「（アスレティックトレーナーが）未だに何をやる人たちののか、理解されていないというのが実情です」といった厳しい意見があったり、質的な向上を目指して頑張ってほしいというエール、さらには「私はアカデミックは苦手ですが、現場の修羅場をくぐり抜け



日本アスレティックトレーニング学会が設立

てきました」というスポーツ現場ならではのスピーチもあった。

確かに「学会」という言葉には、非常に学術的なことを追求していく、あるいは得てして現場から遠いことを議論する場という印象がある。しかし、山本代表理事によると、必ずしもそうではない。「学会という形にしたのは、学術的な部分での追求を行うことはもちろんですが、たとえば世界に向けて何かガイドラインや提言といったことを発信する際に重要になってきます。そのメッセージを発信しているのが日本学術会議に参加する『学会』であるか、そうでないかは大きな違いがあります。研究の成果を発信していくことがアスレティックトレーナーの社会的認知を高めていくことにもつながります」。つまり、このアスレティックトレーニングという分野でわかったことを世の中に広く知ってもらうための基盤となることを意識しているという。

また、「スポーツの現場で活動する中で、たとえばアイシングの時間がどれくらいがよいのか、あるいはどのような内容のウォーミングアップ

を行うのが効果的なのか、といった疑問が沸いたり、より質の高い仕事をしていく上で根拠となるものが切実に求められています。その部分に対して、ある程度のエビデンスを出していくことについても、本学会が担っていければと考えています。それがたとえ一例報告であっても、現場としては非常に有用な情報になるはず。そういったことを集約し、互いの交流の中で活用していくことがスポーツの発展、アスレティックトレーナーの社会的認知を高めることになります」（山本氏）。

今後、2013年2月には東京近郊で第1回学術集会の開催が予定されている。（浅野将志）

on the spot欄では、学会やセミナーなどへ参加していただいた様子を執筆していただいたり、最近の話題をニュース記事としてお届けしています。下記のメールアドレスへ情報提供をお願いします。
bhhd@mx.mesh.ne.jp